

いのちの御霊の支配 (3)

【聖書箇所】 8章 1～14節(11～14節)

はじめに

●使徒パウロは言いました。「だれでも、キリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)。私たちはすでにキリストを信じることによって、全く新しい性質を与えられた神の作品です。そして神が私たちに望んでおられるみこころは、私たちが神の子どもとして新しい歩みをすることです。そのような歩みをするための力は私自身の本来のものではなく、すべてキリストを通して与えられるものです。私たち自身の力で新しい歩みをしようとすると、たとえ最善の努力であったとしても失望に終わります。ところが御霊の原理に身を任せるならば、御霊の力が私たちのうちに働いて、新しい歩みをすることができるのです。今回は、特に 11～13 節を取り上げたいと思います。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 8章 11～13節

- 11 もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、
キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、
あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてください。
- 12 ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。
- 13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、
あなたがたは生きるのです。

1. パウロに啓示された真理(罪が法則であると同時に、御霊も法則であること)

●7章に出てくることばは、いつも「私は」「私が」「私の」「私を」「自分で」でした。その「私」とは、イエシュアを愛して従っていこうとするキリスト者としての「私」です。そして、「私はしたいと思う」「自分でしたい」「自分でしたくない」という意志的表現が盛んに使われています。ところが8章ではどうでしょうか。「私は」ということばは消えて、今度は「御霊が」「御霊によって」ということばが盛んに使われています。この御霊によって、私たちはそれまでの自分の意志の力ではできなかったことをすることができる者とされるのだとパウロは述べています。

●「自分には善がしたい」という意志や思いがあるのに、なぜできないのか。それは罪が法則だからです。パウロは最初そのことに気づきませんでした。一生懸命頑張って神のみこころを行おうとしたのです。最初はなんとかできたと思ったのです。しかし時間が経つにつれて、それは辛くなり、重くなり、結局はパウロの力を消耗し、無力にしました。引力の法則と同じです。法則は私たちの意志とは関係なく働き続けています。その法則と意志の戦いにおいて、意志は決して法則に勝つことはできないのです。法則は私た

ちの意志の力を消耗させるまで、無力にするまで絶えず働き続けているのです。パウロはこの法則に勝つことはできないことを悟ったのです。

●と同時に、パウロはもう一つのことを悟りました。「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」(7:25)、「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。」(8:2~3)。つまり、「いのちの御霊の原理(法則)が、自分の内に働いている「罪と死の原理(法則)」から解放してくださるということ

を悟ったのです。このことは大発見なのです。私たちがキリストにあって新しく造られるために必要な悟りなのです。この「御霊の原理」というものが働くとき、肉(自己)によってできなかったことができるようになるのです。それがいかなるものであるかを個人的に、自分のこととして経験する必要があるのです。

●暖められた空気は黙っていても上昇して行きます。ヘリウム風船を放せば黙っていても上昇して行きます。浮かせる努力は要りません。ただ手を放すだけで良いのです。法則にゆだねれば良いのです。もし私たちがキリストによって私たちに与えられている御霊の法則に自らをゆだねるなら、御霊の法則が私たちを罪と死の法則から解放してくださるのです。法則と法則の戦いですが、御霊の法則は罪と死の法則よりもまさっているのです。ですから、私たちの頑張り

の力を抜いて御霊にまかせるのです。私たちの意志や努力や決定によってではなく、御霊の法則を信じて、ゆだねて従うのです。肉の思いは死であり、御霊の思いはいのちと平安なのです。

2. 私たちの新しい責任

●8章12節と13節を読んでみましょう。ここからキリスト者に与えられた新しい責任(義務)について考えてみたいと思います。

12 ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。

13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

●「特権」には二通りのものがあります。ひとつは「**何かをしなくても良い**」という特権です。つまり何かから免除されているという特権です。そしてもう一つは「**あることをしても良いという特権**」です。最初の「しなくても良い特権」とは、「肉に従って歩む責任(義務)を、肉に対して負ってはいない」というものです。一言で言うと、「頑張りなくとも良い」ということなのです。あなたの力や頑張り、良い人間になろうとする、立派になろうとする責任は一切不要だということです。何と極端なことを言うのかと思われるかもしれませんが、そもそもローマ書は革命的な手紙です。この手紙が理解できるようになると、その人はまったく違った生き方へと導かれます。また、神の福音の恵みの中にしっかりと根付いて、良い

実を結ぶようになるのです。

●「しなくて良い」ということを言い換えるなら、それは「・・・しなければならない」という世界から解放放たれるということです。「ねばならない」という世界は律法主義です。礼拝しなければならない。祈らなければならない。奉仕しなければならない。愛さなければならない。「ならない」「ならない」は、良い妻にならなければならない、良い親にならなければならない、もっとすばらしい教会にしなければならない、もっと立派な説教をしなければならない・・・「～せねば」、「～せねば」と、次第に自分の首を締め上げていく、これが「律法主義」です。

●この世界はすべてこれです。学校にしても、会社にしても、「学力や業績をもっと上げなければならない」のです。そのためにひずみが出て来るのです。不登校の問題もそうです。「～しなくてもいいよ」の世界ではないからです。しかし福音は、「しなくてもいいよ」という世界です。ただし、あなたの力で、あなたの意志で、あなたの頑張りで、あなたの熱心で「しなくていいよ」なのです。これが12節の「私たちは肉に従って歩む責任(義務)を、肉に対して負ってはいません」ということの意味なのです。「肉」とは、自分の意志、自分の力を信じて、自分の最高の熱心さをもって主に仕えようとすることです。教会の中にもこの傾向が入ってくる危険があります。「もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです」(8:13 前半)。しかし、反対に、「もし御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きるのです」(8:13 後半)。

●福音を聞いても、御霊の支配の中にとどまることがなければ、「ねばならない」とする肉の働きが起こって来て、その人のうちに自由が無くなってしまいます。しかし御霊が働くと、福音として受け取ることができるようになるのです。たとえば、「わたしのほかに、何ものも神としてはならない」という教えがあります。これを肉で聞くと、「～してはならない」という厳しい命令に聞こえます。なぜなら、肉の思いはそもそも神に対して反抗するものだからであり、神のみおしえに対して従いたくないという性質があるからです。ですから、「肉にある者は神を喜ばせることができません。」(8:8)。反対に、同じ教えを御霊で聞くと、「この方ほど私を愛してくれる方はほかにはいません。この方こそ私を罪から救ってくださった方だからです。この方以外にはだれをも神としたくはありません。」となります。これが御霊の思いであり、御霊の働きなのです。そしてこの御霊が、私たちのすべての領域において(礼拝、奉仕、あかしの生活、ささげること、愛すること、与えること等、必要な知恵と力と恵みを与えていくのです。御霊は、私たちをして、喜んで神に仕えさせることを可能にする聖なる方なのです。

●私たちに与えられている特権とは、自分の力で、自分の努力で、自分の頑張りで、「・・・しなければならない」とすることからの解放です。御霊にまかせることを学ぶことによって、御霊は私たちのうちに強く働いて、神の子どもとしてあるべき存在へと成長させてくださるのです。そのことを、信仰をもって受け入れる必要があります。神は肉を喜ばれません。なぜなら、肉によってできなくなっていることができるように神が与えて下さった聖霊という賜物をないがしろにするからです。

●これまで、「しなくてもいいよ」という特権について考えてみました。では、私たちは何の責任もないの

かというところではありません。自分の力で神のみこころを行なうという義務から解放されましたが、これからは神の賜物である御霊の原理が私たちのうちに働くための新しい責任があるのです。13 節に「御霊によって、からだの行いを殺すなら、あなたがたは生きる」とあります。肉によってからだの行いを殺すのではありません。「御霊によって、からだの行いを殺す」のです。これはどういうことでしょうか。それは、言い換えるなら、「私たちのからだを主の手足としてささげる」ということです。もし自分の肉の頑張りですべての手足(頭も口も含みます)を働かせるなら、必ず自分がしたという誇りが出てきます。しかし私たちが主に祈って、自分の手足を主にささげ、主の目的のために、御霊の導きにゆだねるなら、自分でしたと言えなくなります。聖霊が私を導いてくださったということになるのです。ですから、私たちのすべての生活の中での優先事項やある決定など、また教会での働きや計画の中で、御霊に支配権をお渡しして、その導きに敏感になることです。あるときは予定やスケジュールが変更されることがあるかもしれません。そうしたことに決して意固地にならず、常に、主にあって柔軟性を保つということです。

●聖霊の働きはとても豊かです。主の弟子たちは聖霊を受けて大胆になりました。恐れ知らずの者となりました、そして物事を見極める冷静さと知恵をも与えられたのです。イエシュアは聖霊のことを、「決して渴くことのないいのちの泉」、「人の心の奥底から流れ出る水」としてたとえられました。イエシュアは「**わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですから、わたしも働いているのです。**」(ヨハネ 5:17)とされました。イエシュアの公生涯はまさに働きづくめでした。しかし、イエシュアの内に聖霊が働いておられたことによって、御父の働きに参与そのことができたことを忘れてはなりません。

1995.2.19